小乾

へ5
1867
1

郎潛居士遺文

引

余不解諧歌、秋風翁之有鈔
諧於世、閱之先人之言矣、昔
翁載於製烟具、刻一首、以貽先
人、每酒酣興至、吟誦以嘆嘆之、
去今二十餘年矣、丁亥、先忌、從

祭餞于門下生、既畢而內集、及日之久、廣吉甫至自南豐、致其家先生之書、既罷而入書房、披緘燈下讀、曰、先伯父遺稿在家、頃歩、家君及其門人謀將鋟之梓、皆因余請先生之有一言、再三辭不可、敢以告、余讀之三復、法述注下曰、賀矣、廉卿、白首戴髦、我如其孝思、何乎、宿齋以來、悽愴有不能自已、至上不意明發不寐之夜、而又翁之遺稿者此舉矣、追懷舊日、憑几瞑坐、憑前

松竹、猶學其吟詠之聲、若有
人焉、于我簾櫳、恍乎惚乎、吉影
無容、不曰聽於無聲乎、況空谷
之有跫乎、遺愛亦存、感舍亦俟、
遂把筆而洩情於文字、余之
不解諧歌、廉卿亦知、知而命之、

豈非以先人故邦、先人博達、風
月餘情、國雅聯俳、出口出文
若翁嗟嘆、必當非虛觀乎、
余則當是夜而見昔先人於廉
卿書上、若有受教者然、加題、

文政十年上巳前夕

北筑　昭陽龜井昱撰

龜井昱

幹に角肉を畫て骨と畫て
杜子美の云し畫の骨とは
なを畫て乃事業をもちにおしき
と云て礎とは形容の月化箭
乃幾向を骨氣雄高寒と晉子
孫流亜や沙門まれ乃若りし世を
淡の姿を畫てしと聞ては

今はや其人の流りの世に出し誹
文の世に和文を出て一乃至の代
なる世数の流れを汲む世の人を始め
漢詩に和字を交ぜ云ふ所の
なりなる俳諧みまして
たやし如きは世の色を分かれを
家として狂歌はよろづ一事の

書きなる俳諧ならは芭蕉翁
の書面発句あるため
ふる本を忘て古情
此箱の事なれ一ふるの芭蕉翁
の形をけも能たし出るる
ものなる世ふ以ては発句の志
し侍ふ大詳ふ数年を入られ

いまし世人の漫なめる面目をも知る人若少き、満ゐくたらぬるを後世に子雲の行ひ必是を為ん事は今の世に其子雲なる一人なる暘城羅士序

古昔の志人也

学深の秋風庵月化主人は四代を地をちらし住て久く秋風の新なる我楽むせる我楽の徳を学ばやとを事のすやいとは祖翁乃あるをほかるり俳諧なる大江丸恵島の

清ようて弾く琴のこゑ
十度はうたるものむの一曲海のうて
そのき移あまくみちるを七年
那さむ世二七枕秋三七撰ぼち
うれを戦さ行ちるに出陣立
やはく頃く撰る世をはるかぬた

枕子夜さて寄を戦さる
さかを新おかをくるを八子坊乃
あるを一を二を花扇して一集戦
那く及ておれを寄者の一人く
かえうるかなく戦士
徒をとるあるるあるを墨く他の

風人と漢学を論ずるの友のちなみに
ひとつふたつ法みに弱るこゝろを
慰るれと

を保五年初秋　茂九

凡例

一遺稿と様の事いとる壬午の春に見而法
りあり一時玉来りて其ゝりを中出て許容
を受ゝり因ゝ翌癸未の歳より玉来
及び弗水ゝ遺稿を拾ひ集て玉来ゝ後を
書ゆされゝも考訂いまゝ調ふして弗れ
已の後せり丁亥の冬まゝり考訂略完し
因ゝ竈井帆足の二先生の序を求め又見
子達よ為して跋を作ゝ一也拙ゝ世故紛

伝とゝく絵ゝ心ゝ伝ゝ推移ゝゝく今茲
壬辰のゝゝ玉来も又殺せゝ有ゝ此度急ゝ
其事ゝ取計ゝなゝ

一此度上様のゝゝ小児ゝ扶木保長杖姪外孫
彦國ゝ力ゝゝゝゝゝ四ゝも自ゝ其ゝゝ記へ
ゝれゝも序跋ゝ多ゝゝく親ゝ人の煩ゝゝんゝ憲
ゝて安ゝゝゝぬゝてゝゝゝゝゝゝゝ

一浪華一首ゝゝ記ゝて此ゝひ萬の事ゝ誓ゝ
肖子跋ゝゝゝ有ゝ此に詳ゝゝゝ

一遠稿ハ文二巻歌白一巻ゝゝ賛一巻ゝゝ此

序八

ゝゝひゝて先文ゝゝを上様ゝゝゝ
費ゝ畫費ハ他日を待ゝものなゝ

天保壬辰孟夏

故秋風舎二世
長麦蕎桃秋

目録

巻之上

一 秋風庵記
一 仙津ものゝ
一 淡路姫の碑
一 篁の井記
一 端居三咳

一 益山記
一 聲者ふ〻ふす碑
一 硯匣記
一 百人伊勢紀行序
一 安譽淨之行狀并狂言紀
一 勸俳學文
一 石火集
一 芭蕉翁の木像を張畫こうつす説
一 知命乃言葉
一 芭蕉翁略傳

一 古筆帖題辭
一 そいふ一枝起請文
一 筍を盗れし雞

巻之下

一 芭蕉翁像畫賛
一 上田三段
一 筑紫題林集序

一壹桐辞
一伊豫日記序
一浪華より京へ帰る消息
一木綿山つと
一節紫琴及案跋
一梅の木像を作りて送る歌
一花乃山踏
一隈川辛夷辞
一休俳帖
一いさなの肉を謝す

一明府君より御賜りて賀莚を設く
席上の言葉
一俳集り著せるより句の誤あるを
正す説
一七つ目牛の賛
一かくつゝみ
一富士禅定
一園扇漢
一十五夜月蝕
一俳徳頌

一九州題林集序
一一溪法師の豊東の行を送る詞
一駝岳雲白集敍
一三石亭詩

目錄畢

梅風菴文集卷之上

梅風菴月化著

秋風庵記

天明乃そしのれ年此日西の郡姫田と云る所よ
閑雅の地をとむこと十二畳をふさ習にして
稚家のこゝろをよろこく西南乃方の庭
を畫きこれる深山木ともうつし植るゝ其
中ゝ櫻乃花の薬ゝくれよりも新さし出
せるとゝる人めまてをゝし毋屋卧所府等

つゝみ清げゝゝ又十四畳えうの樓をよ
ゝ貧てひんゝゝを望めり長閑君の待必ゝ歸
ゝよひゝゝむもよゝうなゝゝ其人をいまさねと
ゝを用ハゝも詠めゝゝ袖ぬゝゝすゝゝ四面り
塀ゝけわゝゝ名ゝ知へる趣を後竹うちゝゆて
霞ゝゝ陶瓦の代ゝゝす正元ゝう無ゝを
制も出さねゝ價のやすゝといへゝゝむゝ閑し
心ゝゝうあゝゝえいゝゝ四十にゝゝ滿すして
かゝるもの好を公ぬゝゝ辛ゝ以けれゝゝなと
世人乃評せむを思ハゝゝゝゝあゝゝひとゝゝる

せむれのれ虚弱なるに二四疾さへひゝつなゝに
加へゝゝれて家れ事をひゝゝ計ゝゝん人ハ壽を
損ゝへゝゝとゝゝすゝもゝゝゝ生あるものハ死あれ
ゝゝゝハゝ其期乃来らむハゝゝハせんさもあゝ
さめるに思憂もて齡を延んハ道ゝゝゆて
もゝゝるゝ家ゝれむゝ父母乃御をゝゝへる
世の塵うち掃ひ事早寐安歩晩食の
四味ゝかや習ハゝゝゝゝ此ゝゝゝみゝ及へゝ恒
の座ゝゝさゝつねのんゝゝゝとあるに志ゝゝゝろ
ゝゝ俗歌をゝもゝゝゝぬれそゝれゝむつれの

うゝひ人り成して樂しゝ興せしもいつしか
獨たのゝまゝ郷しゝや國こゝゆすき者
乃文りゝえして親めるゝ多かゝ弟よも雪中
庵のこゝ世なる宮ゝ殿居すゝゆ あゝゝく
四ゝつれなくもゝあるにすゝき一むゝあし
らゝる芭蕉の苔乃自画賛一軸ゝゝ向よ
ゝゆゝくいかゝるゝ品うゝさせて秋風
ゝ呼ゝはゝゝ庵の記後ゝゝ係て贈る
ゝれのゝゝ翁乃肖像一軀須巾めゝて
揖ゝよ手置ゝゝるゝけゝ寸ゝゝなるを

親屋杉風のてゝゝゝ刻める物ゝゝ是も居士
ゝゆめゝゝれつ又寂河路や島田の驛ゝれる
塚本如舟めゝゝ翁ゝゝ交ゝ淺ゝゝゝの河ゆ
拾歴乃杖ゝハ七人を訪れゝのち宗長尾よ
杖を留ゝ京を尋れゝゝ彼芹橋も柔乃
ゝゝいゝれ口すゝひもこの法の事なんゝし
其ゝすゝひゝ愛敬の茶碗あゆゝ塚本の
ゝゝゝれる桃舟氏家ゝゆめ買るゝ東武乃
杉浦蘆角老人ゝれゝ舊友の回ゝあゆて
壌ゝ受つるゝ老人ハ又ゝ子に風流の縁ゝて

送ゆゑ賜はぬこと多ひなれども人〻製なる
いろゝも無慙なゆゑこれをつけても翁平生乃
清素の程はもひやられぬ是蓴菜拙い洪道
を執す新人まことゆゑくそこそやすく得ること
よろこびになむ予うむとくれる永日して
かゝ集れる是や侍ひのこゝろはれてるなるべし
いかなる豪勝を雪中の筆まつそこなれを
贅せしはしめゆゑ変よりて生涯を終ん
の素意あゆゑるに少の閑居覚束なく
はそはゆれを有ゝけ乃智を出しそこ

不善をなるとしこの一すぢをいこゝぬまて
も守ゝ治ゝやゝ心よ拙ひぬ世外の願ひも
あゝ望まなこうまゝ世の事に世ようゆに
死んまゝ〻はるるなるべし

ゝゝ川の乃清も心悩せて尾の秋

瓜つくゆ

みの〻国の菓乃新真桑むゝよ尾すゆ
胡瓜味ひ他ゝ西ゝ瓜なく名縛四方よ

芳しきれいうやたゝきとぼうかいひて
仏の事に通せゆ暮夕顔の時ゆかり
なる彩絵瓜南瓜乃むらけまきひろれる
うの代菴も古めうしく今年北の方り地を
借こと十歩餘ゆにうの瓜作らめと老圃
よ問つゝ二月中旬頃よ種をかろし弥生の
雪ふ水薄き卯月の旦り芽を摘むと
山ほゝよりたゝなく時ゆこうの乃色
せる花の咲出しうれしうるを宮さめ
よなむまきぬい事も実も一ゝ変て結一数

ものにうゝゝるきのふハ指のかゝりえうゆ
うゝゝ哭の新も西ゝかゝてみる京月の
月もうちふれひゝ瓜の咲ハかゆぬ大和ゆ
御堂殿よ奉れるものゝこて奇しきむ色
語ゆハ風つれゝいゝくさゝゝれ貴ゝまと
なめる人ゝよも踏ゆつ又滑稽の徒ハ来ゆ
ゝ恋ゝ履をいゝ人よ任する事ふ四の
仏を弟ふゝゝ地瓜のゝゝるゝゝいゆ
しゝゝ方ゝゝしゝのふゝゝゝれよ翁ゝ乱れ
ゝる世乃碧ゝよ引ゝゆゝやゝゝ乃

治化の馴るる氏の月まに聞も及べしまさ
凡八厨を愛めるものもく婦人乃あまさ粧ひ
して通る蘭麝のうほもよ道すがら此仏
悉く死るしこの書よたるせも我國の素さ
素を去る約束に従ひてのみ世ことをやめて
誰も綺羅を飾らす者氣の觸なるれも
凡一帯もうとなる所いつくしみの恩澤
うるうそのまくくるも及ばれてもこの凡乃
あるしは東陵の賢さも慕はす孫鍾の福も
羨まるるうる身を軽くひるるも窓のもとに

膝うい抱く涼風の来るを楽しむ
鮑まてう外う求めるうれ皮

淡婆姑乃辞

あるふみよ南亦國よ淡婆姑といるる女あり
疾疫を愛ひるるを種しう一草を服して
癒る事を得るるり故ようのうをを淡婆姑と
稱くるつかり又此るるに此る說あ是人を
枚ひ一切をもるく及縄煙ともいつるるんすて

なをくさなるに十數字あり漢書に出たり
煩しけれバ爰にしるさず何れの相人方とや
是と顕して邊のすむ浦なくもともなかりさ
とすしもひろめて本草に烟艸とあれバ
枯もひねそやく離る事あるべからず
相思草ともいつたこの二名普く通用せり
さるに酔醒能識のまゝ功ありと録せし
又鶴林玉露及ひ五雜組に檳榔の四徳を
述べたるに烟およびこの物乃能毒ハつゞら
かり烟酒録に著しおけれバ略すべき

予あへてねがふ目前日用のうへにかゝる八品題
乃そなへさるまゝ阿るにいまだしくいふなり
俳席に列なるとも雜題に探りえていふにも
あくみたる果よして却て秀逸の句もこの
淡芭菰より起り出し又ハ碁将棊局上の
勝敗こゝろハ此時にあたりて一心不亂烟管より
火をうつし小首うち傾けて一服することゝ
一ふくにおもひをこらせるうへにおいて妙手
をもとめえたる窮所に佳境ありとも
かくや乃場をいふなるべし或ハ化貨財の争ひ

を扱ひ或ハ不平の中を流さゝしうゝみに
願をとゝしめうち和けあるひハ嫌にう
ちゝゝゝゝゝゝゝ輪をすまこすのこをを採さく
赤瓶弦つるもあるあるゝひなゝせる
のかゝるゝて颯ゝの弾をも楽しむなれ
是等の數事皆ものゝ力をうゝくゝうの
佐使をうれるゝておほうめを拾れのゝ
うてひゝうゝ舟ゝゝ友ある心地ゝちゝも
ゝれゝるを思ひ出ゝ物をよ月うある時
もゝすゝひの一瀬ゝ退屈をおゝえす

旅路の片瓶の因ゝ一樹の陰乃雖燈愛
拙ゝゝゝ徳孤ゝすゝいゝゝ行のを
皆しいうれゝふの明乃義磨のゝし絵う
南蛮より来るゝ崇禎ゝ至りて専ら
流ゝゝ本朝ゝ慶長年中移を西洋より
得ゝうゝいひ伝ゝ寛永の法ゝ月よ
日に流行して酒の代ゝ茶に代ゝ業を
なゝ戯ゝれゝゝよも此年なゝてハ
ゝ思ゝゝよゝゝ永ゝゝゝゝゝか

菊田井記

しらうすむなるとよめり其山ふ
もとにて家の屋敷の跡の中を穿て
水を求む田作るとく今ひ井を鑿て飲む
といふる大平の代り閑なる蒼生乃数
なりしんり此業を精しく年経るを
鍬とりのおきなとしてあまたれまず男
とも山を遠さけ石を起すもこの井を

八

うちつかるれまふこゝハ龍俗り鋼もほりとすす鑿
を授せし深遠ふもなりすとはとく
杉井の水のるとは極めて亀井代みの方
代ものくもすめんハなもしに目代のの
憐むて遠くゆ汲運ふる一儀り労を助け
又ハ菜のんゝ乃ゝとちゆつ粉し
暑をとられ井のわれとろこひほ
なんむものくるゆ堀れるとを丈八餘り
吹簫女子乃神恩深くも派をゆ涌
北ゆ湧て潔よ水を得ゆほうねの井

乃ちくなくなくうれしくうみくるかく
てゐをたくみくゐのくちを笑せる其切
の終れる日や戌戌の日なりてそうこれも
うの水をを平けしくか聞傳ふる句就氏を
紀きる春社まつ雷れるもおろしくきくは
午時くりも雨をちちぬ此日降きるを社
つねをくゐ歸くくの設乃あをれかくもを
す井の名をり嘩るハを昭丙子二月二十
四日あり

端居三吟

蟬の鳴木をを毒も如し風もなくと吟く
も要さを尚くくの苦窒なくよしさるを
ても此もれ方のうへをを五徳を筆し
賦ありくの岩文人の猶を得なくの
堪くくまを日盛くも暮るもくくもくを
乃面白さくに聞ゆるハ楽を其中り
あるくくあれくくをくみを歩りつ

[illegible]

[illegible]

聖もあるひとはさはらぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]雨井 播中井名の水を注げ

[illegible]庭中樹[illegible]

秋[illegible]催す[illegible]奥より入[illegible]

[illegible]の夕[illegible]

笠山記

近き世笠山の毒ひ事行れて一時乃奥を
なすそれら石[illegible]
なる小岩壁小[illegible]
を狩りて笠中[illegible]
[illegible]
象物色[illegible]
名一所[illegible]
[illegible]
かくして稱[illegible]

是をなむ會釋石とつゆ白よハ砕き
くこれをゆ〳〵十つ拵ひ洗す此砂して
河湖江海遠山嶋谷雪月風雨の景迹
をこむ春乃波ハ恋の秋ハ冷〳〵夏ハ徐
よ冬ハ烈〳〵浪の西つの景別あゆくら
和歌に見れ浦波なくハ殊更なれハえむ
人もくに心留つ亜〳〵又ゑこまくて
瀧を爲す山あゆいうふくくん小野山
のくすくるむも知おひ出さるれを無
雜乃詞と謂へ〳〵其外達う亜つの節

移徙首途等ハ祝義の益あゆ又る社
家宅人物生歌つる木なくハ彩れるゆもて
あやなす星を西亜を踊くくうも山ハ座
なゆよく万物をうむと宣まるれ僅三寸
乃匙を弄〳〵かるくを接し出さむ
とは時枝二派有て手うゆ見しハ清原流
とやうれを學ひ人の招よにまれて
これを答とせくれ衣の梅つもおす
きれいの幾年の長慰くくまへうたと
祝〳〵するあるれいるハくまの亜ハ

思ふあに工夫を苦せり君ゆ又これう記
ぢくりかく拙の苦みむくいくたまへまれ
ゑかめり辭するゆ何なくやうく問ひ
ゆふ聞てゐ年をたしらば

聲者よ示す歌

四度とやうん衆ふとやうむかの道の官を
得るゆ法師とて常にいちり行る

あるらいのうまとりれくてよ在る書るをも
わくてゐ身すくゐ教へをけくちく作くんよ
も語を成へるむやと問ゆうとゆまゆ事はあを
そうとよ既ようとくちの行佛とも崇めつる
餘たもつ乃をとの外歌うも仏のみあれ
伊勢代望へてそうれと閑く虚耳の句う
世人の眼をまゆせり花咲の翁もきの後よ
明を失うれくいやゆ法道よ耽るまよ
ひよたくく目ハ離妻やうなくもとも妄雜
妄情くんよそ月も雪も口見るはくゆう

して其見えまさの味ひをもし然るに我
が俳諧を作るに何を目をとのゝむや種々心を
狩ゝとけを蒔くとき花を咲すまひ出つ物
いかゝ心も無つ友なくて自ゝ慰む書
夜の長別もなく老くいまだ楽を好む
つまものゝとくとみるる言下に供しく
恵徳を元つか白居易か琵琶行の語か
拾ゝあるゝ川琴琵琶に流れる啄木等に
羽衣霓裳の曲あり古俗を祝ふ行ひ
江路を求めゝ到らんとゝ

十三

弦ゝ曲亭明ゝと呼ひ必應せを

硯運記

江都ゝて梅谷羽宗因七世乃孫ある流を
継ぐる田東庵花影筑紫路の杖を引
けるゝ菴の糧を減らせるゝもるるうち
或日文筥を探り無せしすあるゝ
須臾の俄ゝ旅の仮ゝ初めるゝ相ゝ

出でゝ是を一句とぞなしける
すあるは横三寸に竪二寸に何の木なれ
ども黒くすいたるを筆とす
を種ゝ物ゝ入れて蓋を美人と
碧玉とを図せるを端の名八溪を殘ゆ
く秋を歌けり字胡蝶氏ゝを彫めり
今ハ中ゝ画図の中に似ゆるすゝむ
白氏ハ毛延壽を引く人をやゝいはゝ
こゝを刻める匠人も昭君ゝ金をも得て
加ゝ刀法の巧を盡せるにやゝ疑る介有

永叔ゝゝしめる文人を明妃の出あり定家
家方両師の外なる和漢乃題詠を風流
又ゝゝ詩ゝ詩ゝ他の物好を深ける
ゝゝ印哥を加へて一章を添へ
今の頒都を雲のなかゝれ

古人伊勢紀行序

業平朝臣の伝ふ駿貞閑斎あゆゝ行
南北千ゝ川乃ほゝゆふ人ゝ

生侯木強こうしてさきだたの身乃松す
大なるとこひねさ（猫）ふるてりぬ結るに流注を
好めるまま中将の色ふかれしまも学らしと
此おとこ伊勢守国のかるの女うのてあて
侍れとも御あるとまとよりとくむおちん
弥まあゆとまふこいつたるを指之のこと
つけふく松竹とたるまれころほひ梅柳江
とるとしの春迎むと月まあこうれてハ
明日れとを花ゆまり雨を行てきひとる
書も木の下をこ而とし元節を戦るこふく

とあのりふうたりはまつの岸な
らくるらしこまていひいしし句百数
十二ととしるまり人の国まてもれるまま
なんやまとこと々るうれを集めし一冊ふ
のそしめよ絵書をとの雪河ゆこれるむ
此いせ物こりれ春とた

安磬律こと行状并歌言記

阿爺の成立を聞ゆるに正徳四年甲午乃
生れにして上に兄なく下に弟もなし然の
ところ難波へまゐりしめせる頃より叔父なる人の許
にありて財を通し貨を販きてこゝに年ま
別まてたのしみとて家に帰り其業にいそ
しけり難波津へ船乃往来に商賈の切を
積ことまさに凡三十年あまりにつとめ勉
なほやめしことなしわか傍身いつひとり子
ありしなからそれにまさしたれむすめの
子を傭けてひとつ娶し嫁らせしめく

孫にひまこて枝葉しげれる彼安を問ふる
ことに悉く称する事にあらずといへる故に
も思ひ出さるまゝに明和壬辰の年秋七月
市中離れたる池魚乃思ひに罹ることのとき
居を支へて二つにかけて家事をゆづりはじめ
ここちよく別室に退きて隠れすみて其後は
なほも平順にふりにせんとしても足らくお
そしよしたりくおおゆ此日よりして假初
にも貨殖の事をのこしてず稼をいとなひ園
に於樹るを旦夕の楽みとして孫へわ天明の

そしめよ八月も末桃秋よ家をもうせうこの
いはゆる来るべき多病の軀を喜べはさるに
去年の冬離しうきまあはゆく桃秋うかハ
ある師方此旅のやゆく笑しまいつせぬうて
きのふうくたくちに伝せうしひよ桃秋
をうらしめ作ふさ方八十月の注うも仲尾
よ移りゆ五ようせゆうハ十ゆ郷あるるの昔
よ帰るるく歓ひを猿下よ明くる幸乃
甚しまそうく何をうらへんされくはのをう
竹の拙き其敬其楽其愛こつうつ川も

致す事あるこそ侍りくの名つゆ梅うに甲斐
なくこうたれくを尋めまつくせそやとうき
うゆゆみくまくそ唐の大和乃俗よ色する文
をもを集めくこんぬ世乃友を雇ひぬ是とて
も灯影ハものうくやはほしうむ書乃そうう
う淡せ路へるれるまゆ方はのそしめ
なるるむ古くまハ朝夕こ椀の飯もつ
をくく一椀を減し路へゆ是作養へのふう
くくうちなるるの耳うくくれそくまよ
ハ七年乃乃さうなくむく魅めまう出るもの

うこれも所詮ほとけのみちにいるべしやうれ
を性の業つまるこしてついにはれてつねを
かくしひとるべしたまひく農業の利不利
を問ふこうこうひ所させられてはいかなる乃
稱名花を唱へさまひ他の念なきすに目の覺
こうんにも念佛しまへと祖師の御こと
おもしを守り給へうるべし訪ひ来れる
人まで何ごとにも信せこ猥せられハ
ふ無意ようにんせ給へ物しまものを
をつう得こうひてもひうあさすめして

をも人のわうちさまへ物ゆれ魚雪のさうれ
も望こなりて七十九の年も過しさまひく
いこつこなる時ひ又こうねつこものうるを猶
こうちこうまひて仮初めて除えの白なとあ也
うう事もつふまれこうろを世後今住める
色の名を言せこく
得ぬまてを塗を堀田や手の民
こすしけれいこうひの烏いんこしの窓より輝
まぬこ羽の雑莫ハ平月花口癖まも笑覧し
こうひきまこうへまたまへる毒のめてこ花来ん

如月のうれうしの日を生誕乃日なりゆ古稀の
賀の時なりしふ八十の祝事催しまんと
聞ゆるに頃うちふゆうちひさしくもやう
なんいよ〳〵年あれくたるへその々〳〵世の
告ゆ閑るとしゆくふくひ浮くよ
事をなくおいなくゆはふ祝き数ひ
さうゆるちいうてゆくくゆくくゆ来む秋を待
〳〵六十一年ゆ前の世乃桃ゆゆさうて熟せゆ
来ん秋も必ずたいる年有ゑ〳〵それまく
の命あくそく張ゆうふる笑ひまへくそひ

今も目のあらゆるなるむ行そ〳〵ゆすやうれる
仆事も背くくよにもあくひそ却ちうき
ひとくあさるゆゆれ来別つるそうゆ招きて
壽盃を催すそ日

すれしもあるうう李ゆものとし
老子道君ゆ故事をあやうゆく祝〳〵まつせ
しゆくゆかくてひくくに孫生もるうき
卯月と暮くまるもせぬ敢乃神るをくつる
まそゆ幽初そあくくうゆさくくゆくくるも
そ弁ゆ起卧しくまつゆ外面乃陽氣生ん

なるを平遠ちまひ御れるとうの葬れるあるへ〜寒月の末ちゆ桃秋ちまと移り見まを
き由の終つの同し愛まうんしまつるふや
又風友の手を待か毎まられたく洲席を
塞けり来客への妨けすちゆと毋ちる人まと
俄し終つちとうち皆人の律義いそむちとあし
帰らそ平乃作ちろかまつて是等の事も
とゆうへ終つまそとおひあそる怠よ角
ま甚きにうまあちけうの紀ふたひて
止めまつうせすす水毎月乃十四日祇園會と

いつまとと信つまつる家ま移しまつせ胴
きサロ云ちゆ係りわし郭ひせ澤せ
光ちと月代剃ま石刷ひそちあちゆ訪ひ
あちまちまひぬ是ち時毋まと杖乃ひき
ねまあふれそしまちる甚ち夜ちゆいちつま
増ちみちまちて下痢のちちひまんてまひ
のちいちちしこ脛氣を保せりかひちのち
まのひをを治ひし侍河ち毒痛ふま乃
くすし限まに有すへかまつまを國ちゆ
まねくま事なちれ必しも貴き薬無ふちる

なりれさるてもせるてゆと思ふこれは
そむちそ年こまふけうの罪深うるへしとあれ
ふ人うるるきに資ちよ財を費させしも
佛こころをまてなめうゆ氏族の外も親し
める人こそそそそうはゆうく介抱つれ人
夏う中まも涼しこ法文月の中に或ハ急ゆ
ゆうふ如らうしてうるしぬ些むこうろみけ
なう佛教せ見へ法ともみもやれて
復ちまつうもやと思ゆ人欲目して
て有るる暑月のそしめうゆ薬粥をまつら

すに湯藥のこうるに日こに惟悴し給ひて
おかみ物ほつかも寒ゆなるるもとふまつせう
生涯潔癖のおそしゆ物るへかうる事あさこ
こうふ佛氣力もあそぬうく鼻うちうみて
ひうめきぬ病苦をひまつすれハ何とも
なるこはうゆ幾さひもなし法答し給ふも
息の下なゆ十日あまりゆうと唇のみそうふ
動し給へうへ例乃稱名とおしそうれぬ十
五日こつるうへ院のいうをうめうゆ見へ給へ
きそうひこ契置さるへる御寺ゆ教寂上人

あさましく十念授け給ふなと目られころ
よりひぬこれかりして同じ面ふかみすけ達
枕上にさを放れす鉦うち鳴らし念佛乃聲
とこえなしに留の月は新のまとくまにつけ
くも后昇る妻なしとそとゆうまほしき佛法
はのよわり
いくすりかなまとハまみけに夕は巾
地下乃露ハきゆるしなくて十六日午の中刻三言る
の御前にして往生は素ぎとを遂けつか女そ
もとかり男も浄きもちすりてとくかえて蜂

さもほよあけりしく泣つも介しまた淚おし
勤しめしひとらくすれてといふまぜ人を棄もくれ
こく後かとひて欲くるを傷の人とくくいひて
あつひつて屛風ひきまへし焼うけくらち
つとひ国在して霊前ま其在をゆきもとく
親ききか我分もゑて母悲し
十七日野邊まて送りて奉る法跡も経帷子
あつらしめ用意あれた健ハ例乃作法にまさ
るえ十八日後のまさいとまと十九日遺骨拾ふ
今八郎原白骨の人と作れるせつなさ口すさ

ろくすろうの枝をしをりかく

目の前もちりぬる花野辺の草

石碑もとろくばかりゆるやかにあれて其下に

おとろめなきめてくろうゆ安磬浄之禅定門と

唱へ申す遺しをひ調度も乃中と見る

に書おかせてうひぬるものとくハ後世の俗得

と子孫へのこ示教のこゝろ別に言しく因める

方の追慕乃こゝろ八十の賀とてを近

らゆ浴ゆ来れるハ友方と集りくいまゝ

いろ〳〵ゆ勧めるそれまそハ十年ゆ言一こひ

も曽つゆるこ憲もおそとす枕をゆるゆして

世と辭しゆ〳〵るゆ状とまま愛部らゆ

死ゆ哀感ゆるゆるゆ他の仕へつるこの百ら

うちゆるゆれとそのあるゆしをとめく

今ハいそけ永ゆよ子孫等ゆ生ものゆちこゝせ

ゆちゆ〳〵て拙きを頼す遣しれくものちゆ

寛政四年癸丑八月

勧俳學文

身徳翁曰連歌と俳諧とそれぞれあれども
かなり其中にもやさしき詞をつけてきき
とゝひ俗言を嫌ふて作するを俗談といつゆ
とゝをんを俗言を嫌ふものゆゑあるゝ
入るゝをすして中人以下一丁字なきあぬ輩
よいてゝるやうに京も東も興し
事ゝ事ゝとわかぬ世の好ゝひゝむ
も宜ゝるゝ然ゝるゝ是等の作者一巨の
樂ゝゝゝゝなれゝゝやゝゝゝゝて
やみなむ他の句ゝゝ評せむ人ゝ世ゝゝ

もゝ乃ゝ心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ評
すゝゝゝゝ故ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かのようもとつてあるべきこれ八身こそ
家の業あり方なれば程一部より
二部三部ふる法師の俳諧のつゝもとゝ小
説の数つもれる意文ともに弄ぶるる
べし必ず益あり或人後十輪院内府公よ
歌ゝむよハゆれの書を法ゝ持んと思い
ものゝせしに大嶋を見えて仰よそハ
ゝ存ずゝやむとまゝゝゝれて傾
の書として歌ゝむ便なるべきなしいる
ばゝゝ見ばゝゝはゆ和語を語ん

しゝゝゝとてさて形のごとまゝもあゝし
ゝゝゝ外よあるやゝゝ思ゝゝのいゝね
ゝゝ大学のゝゝゝ知るまゝあゝゝを
のゝよゝゝゝゝ味ひある俳ゝめしゝゝ完
ゆれゝゝゝゝゝ学ゝゝれ八胸中せゝゝゝ
出せる句毎ゝ句のゝ章ハいゝゝゝゝゝゝる
ゝゝゝ問へゝれゝゝゝ和根乃調のゝふして
変化の自由よわゝゝゝしてゝゝゝゝを
返ゝゝゝゝ餘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

石火集

豊之國乃下毛郡宮の山國より白てる人あり
予の庵をとゝも訪れしるあり世さそうゆ風流な
富るゝハあゝすとゆふ処感よ宮ゝくハ世ひ
と思ゝく楽めるゝ浦ゝれしゝ所ゝの新ゝを
長ゝよゝ憂ゆゝく世中と思ひ離れゝ東の國ゝ
九ゝゆゝしゝふゝてゝ行ひそゝれぬほゝしひゝゆ
ふゝゝ乃ゝをふゝの牧ゝゝをゝめゝゝもに

立出しハ過ゝ卯のをゝゝゆゝゝゝうの
橋白川もゝち越ゝ名ゝる所投しめゝゆ
ゝゝいゝけて乃ゝをゝの花山の嵐の身よ
ゝみゝゝゝちせゝゝゝく彼里人ゝゝゝ則ゝく
高ゝゝゝひゝるゝ一期四十九年の紀ゝあゆゝむ
秋も二月ハ張ゆ日もこ十日ゝゝゝる終り
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ閑の名ゝゝゆゝゝるゝしのゝ
乃いゝふゝのゝゝゝゝゝゝゝ空ゝゝゝ影ゝ埋ゆ
ゝんゝゝ宿せるゝゝゝゝゝ暗ゝゝゝゝゝゝゝく
すゝゝ文字摺の袖ハ落後ゆもゝゝゝねゝよゝて

かゝひ一人の悲しゝこんも亂まゝあんとまゝ
信濃國えゝ八理ゆまゝろ同し道よゝれ弥き
も後ゝ後ゝひ八なれし西ゝの國なれそ古郷よ
ゆゝまゝゝせんとゝなゝけ八五妻のふゝゝれ
いゝいゆゝすゝゝのゝゝもゝのゝゝ五百里れ家ゝゝゝ呉白骨
ゝゝゝまゝゝゆぬ五百里れ家ゝゝゝ呉白骨
のゝゝゝのゝゝれるゝゝゝかゝて雉ゝゝゝゝ悼ゝ
のゝあゆひゝゝゝゝ集めゝく霊魂を慰めゝゝ
邑中乃ゝゝゝゝゝ来ゆて物ゝゝゝ一ゝゝゝを
酸鼻しゝゝゝゝゝのゝゝ寂ゝゝく泉ゝゝ

ゝをす石火光中宇の此身とゝ唐人乃詩を思ひ
出せるゝゝ一帖の表ゝ頒して、ゝゝゝゝ
信奥や限ゝゝゝゝゝ人も秋も

一色ゝゝゝゝの本宿を張ゝ無ゝゝゝ
ゝゝ信ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
渡り村ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よ作れるなゆかれを古い羽をえしめ其時代
名こる人こ乃筆記せる物多うゆ又外よ
木ここ刻める色黒い羽の坐像一尺ばかりある
をも蔵せり獅子を彫りて雕せるこいひつこふひと
吹聚八子坊駝岳以待して杖を留し打うち
毛像をえうめしこを忘こうゆくやうに人
してえひ或えを文こく彩めつ今此家に行を
むまこのあこゆめ絵書をぬこて風流のまを人
詠うゆつまここ代伝来の物をかこくこを放
つまここ細谷川のそこなこもふみこして

月は日まれるこ風こ時あゆこくや見いこゆ物をひ
こまれこむこのここむよあるも人乃恨こゆおひ
なこむ所と少ここ乃なこむと閉る窓しく
急角にいむここ行まて襟を受得て
こるこの尾を迎へこゆぬ是こゆここゆ純岳の
教こまこゆして黙止ここてかこいそこひ
こゆ乃幸ひ此秋彼地を趣くここ後こ送し
こるも同こ縁こ八千坊を入ようこするに坊乃
こ後こひ舟なこ乃これこゆ乃六五箇国を
経めこる事こ十五日帰ゆこ凡をこ厨子

の物ゝ笠よりは帯よりは調度めくものも備へて
社中會合百韻興行あるべしとけなげ
墨畫一筆賞せられて冥憲にそなはり
下して俳道の学のもとをもとめんと
はのうたひあむ人よろこれよりもとより
風肝雅心此翁こゝ情
像賞す枯木ある認を踏まむ

知命のこゝを案

てんめいをしるべくは
性をおさむの事こゝ伯玉乃四十九年の非をなる
なりあわしは俳身の間の邪ゝ事ゝ
も既ゝこの事甚年にあされまて苟卿ゝ
賢ゝ伯ゝ伯ゝこゝ初めゝ学ひてん
勤もるく貧ゝうさえなるれはおわしるは必
富なるむおそれもあゝに只猶乃事毛ゝる
ゝゝ又只ゝもゝなる羸迷るの野ゝも
昔ゝ人ゝまゝ出の磯ゝ子島の八千代祝ゝき
ゝあゝゝゝ高砂の松ゝゝゝにゝゝ

の友ともせちに勧めてとみのすを四方の
相知る人に告やりぬむしるしにまし
五十ゐ家ちくに立手まるをさらむ霧をハすつ
つまなめくるり涕もさそいつゝむそのたゝし
きわもて捨てハ何を因とあかすあるを
すきもの頃文車の淵るのちくひとを見きま
や敗鼓の皮も叩ほるる弐四月十四日生節を
きてとて賀のむしろひとをまねきてうち
れあるしまりけを
ふくれ家ゐ杖の年玉貴ひそゆ

寛政八年丙辰春

芭蕉翁略傳

芭蕉翁の本土ハ伊賀乃産よりて松尾氏なり
正保元甲申ハ歳出生俗稱あるを記せれと
忠左衛門を是とすへし諱ハ宗房とて家系
彌平兵衛宗清より出さゆと一説あゆさるを
傳據ありくのまゝ甚直偽ハ定めるを
くこゝろ上野藤堂家ゐ近仕せるつとえを

辞して季吟法印乃門に入り俳諧歌を習
ひ、これを師とたのみ給ふ桃青を
名として數篇の法書を顕し、これを愛に
贅せず其中に草庵を結ぶ行ふ其比
や世挙て興せし檀林流なれども道の
乃木槿の作を看破し、寛文三十七の歳深川
の芭蕉葺を入て薙髪あり、こを延寶
天和の異躰忽変化し門生數千人中興の
祖西風の翁と稱するに東西南北乃志
あり、生涯旅泊の風流を楽み家内の

春日を檜笠に載き越路の月雪に居士衣の
袖うち拂ひ藜の杖突減らして奥羽乃夏
草に起臥あり、終に羅汨の旅に病て
八日の夜夢は枯野をかけ巡る
元禄七年甲戌十月十二日五十一にて南御堂
前南久太郎町花屋仁左衛門方に家
を定て世を辞し、枢を回める人々あり
陪従して淡海なる粟津に送り蔵む
つゝみ、寶ゝ音齋の終焉乃記に
曰しかも衣鉢は伝て法弟に与へ好める

調ととゝ後輩を導き物ゝ薫の道ハさま
〳〵に八宗九宗ともいわれつゝうて既よ
百廿餘年の今日まゝ甚く派〻の流をゝえ
せす傳へ来つるハおゝ那の人乃らゝ悟入しゝ
世ゝ出よりわしゝうつゆつて同し高根の月を
見るゝ者寡ゆゝし此畫像の傳ふるの
事蹟あゝよしを後学ゝ学に渇仰の
情を発さしめんとて老筆を執
をゝを信をもゝ仕へ感應あゝ佳境
ゝも入るゝいゝゝ冥加あゝゝそやハ

古帖題詞

古ゝ帖名家のみつゝ筆せるゝものさゝ百数
十ゝを集めゝ一帖とゝ龜山乃五珠堂
よ庵む文明ゝりて寛政と改るまゝこ十
九元のもゝより燈人氏のゝを通き星のやゝゆ
二百二十餘年の久しゝも衣鹿乃腮ゝらゝ
すゝたゝ敬殘まゝを久むゝに星ぬゝ

ろつくしまゆてみそうくれ経波浪を
そしそこ城のこうに投しむさしの原くさ
つゆくかそうか求め得られつる多年修力の
功つゝもゆそういつゝさゝゝゝ風雅の外
何乃業かくまても弱てふ鳥のたゝなてて
子歳の昔をおもふよ四道を慕つる輩ハ
大空の月はそうかの等しふあまてもれおふ
うさらめやうれつゝ白元風姿をおもひ
やうたも流りの形うつきる其代ろの人
の保今まのいのうるうみ出て感慨し随

めゝしく帖のそしめてうゝ
変わりてそひぬ花もれ事まぬし

そいうい一枚起請文

いよいよの世よも流乃古老のは法し
やさる俗説れ弗ゝもあゝす又滑稽より
ゝ俳の心を悟りておふそいうもつゝす
唯月雪花をと楽むよハ為情京曲節と
ゝるゝ鼓なゝ白作るうと思ひとゆて

吟業の外に別の子細も候へとも但し六義篇
序なとも事はしは皆決定しし姿情景
曲節まて句作来るとおもふ方ちの範り
候なり此外に奥深よりをなせさこ神
の憐こまそつれ感應ふもを俳へ俳諧を
信せん人まとひ和漢はを能く學ふも
俗談平語の聖人乃身なりて青こ才の
初心の輩まおれしふもく切者のふるまひを
せすしく只一向りはいらいまへし

筍を盗れし辯

いとかの雪はたかる弁のふ乃親おまふ人
のこ後をもりむとを世ている孟宗竹
をいるををみそん此あをりまふは向乃國
より来をるを根ふしいふの軒端
まも植しを雪はまをたを乃はをりも
ををかう肌の生を出を爭に来をなをせり
此をるハ孫をををを角ををて其数

のいとまなく悔ゆれども妻なる
ものゝ父乃五十とせあまり忘の間ゆ来ぬれハ
清せる導師ゝ綱して饗すべくとて来る
晦日よりとまりをまひ〳〵間ひ川
ゝの栗栖野の柑子ハ木乃まに等しく人も
おもへとも人もおもへしも残の入まるに
過ぐるなるべし窮まるまてうちも
寝ぬさまゝ乃ゝ〳〵ゆゑうゝ拾めあさて
こゝとゝをとゝ拾ゝまゝゆしまハ口の名
けゝ家童ゝ竹ゝ高ゝかたやゝおひゆゝて

竹林のゝなゝゆゝ腹もさきあ〳〵にさゝゆゝ
間へハ何ものゝゝさゝやゝ笋ゝすとゝひさハく
けゝも太く逆さまゝよゝ撰みゝ接なめめ
聖ゝの跡もかゝまてゝはゝとゝあさまゝ
いまゝのきゝゝてゝんさゝゝ祈らせよゝゝ法
ゝ会するゝなゝ大音ゝ罵ゝゝも附うつゆ
氣沿ゆ心定ゝまてゝたゝゝなゝひ孤んゝ丸
そゝハ此倫ゝる人ゝ親ゝるゝ甚れゆ乃
望めるにかゝゝまゆゝく身の罪ハ落ゆゝ
顧ゝすかゝるふゝるゝいなゝゆゝらもゝゝに

あそれるもの老たる人の子ところてを納云
書をてれすやさしても楚人弓を拾ひて
いへるしにも恥へしそこ法の業すとてかく
さらの嗔恚を業せる作善乃益あるへよ
事りいと今さら臍を噬めるれ餘り懺悔
のこゝをよりをひとを述ふのそれ我奉る訊須
ともみうおいせうしと佛前り又を法